



都市と地域の人をつなぐ

里都(さと)プロジェクト

オープニングイベント開催レポート

【開催日:2011年12月19日(月)】

里都プロジェクト

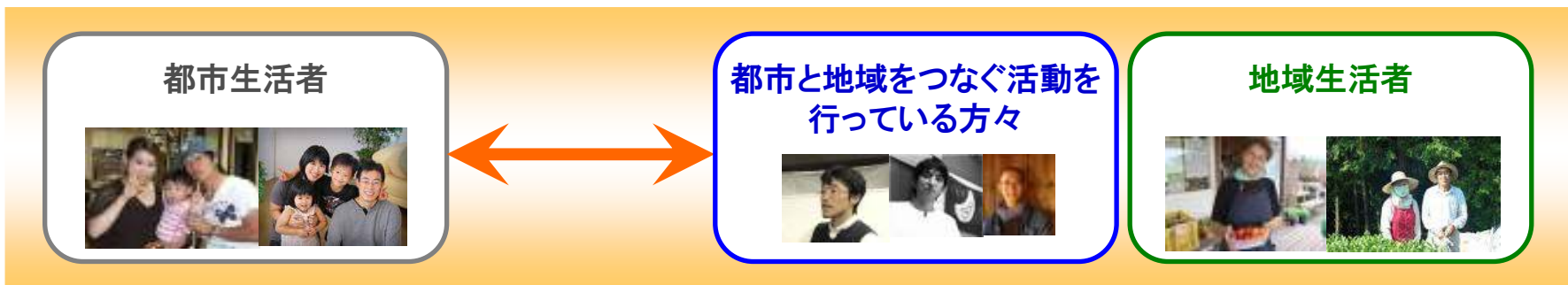
大木浩士、有福英幸、濱谷玲子

「里都(さと)プロジェクト」について

里都(さと)プロジェクトとは、
「都市」と「地域」との新しいつながり方・関わり方を、実践から学び、考えていくプロジェクトです。

「持続可能な幸せを感じる社会づくり」、重要なキーワードだと思います。
この新しい社会づくりのためには、「都市」と「地域」との新しい関係性を模索し、先行事例に学び、育んでいくことが重要ではないかと考えています。

そこで里都(さと)プロジェクトでは、
「様々な地域で、都市と地域をつなぐ活動を行っている方々」と、
「都市に住み、地域との縁をつくりたいと考える方々」との出会いの場をつくり、
お互いが学びあい、双方にとって新しい関係性を培うきっかけづくりに取り組んでいきたいと考えています。



【里都プロジェクト】

- ・設立: 2011年12月1日
- ・メンバー: 大木浩士、有福英幸、濱谷玲子
- ・主な活動内容: ネットワークづくりフォーラムの企画運営、WEBサイト等による情報発信、地域体験ツアーの企画運営、など
- ・WEBサイト: <http://www.satopro.jp/>
- ・お問い合わせメールアドレス: info@satopro.jp

オープニングイベントの開催概要

本プロジェクトのオープニングとして、
『減速して生きる ダウンシフターズ』の著者・高坂勝さんをお招きし、トークイベントを開催しました。

高坂さんは、「企業や既存の経済システムに頼らない『自立した幸せな生き方』」を实践・提唱されており、池袋でオーガニックバー【たまにはTSUKIでも眺めましょ】を経営する傍ら、千葉県匝瑳市で農地を借り、米と大豆の自給に取り組まれています。

「閉塞感を感じる社会の中で、どう生きていくのか?」「地方に赴き、農業に携わる意義とは何か?」「高坂さんが取り組んでいる活動に、どうすれば参加が可能なのか?」などについてお話をいただきました。

- タイトル: 里都プロジェクト・オープニングイベント
- 主催: 里都プロジェクト
- 開催日時: 2011年12月19日(月) 19:00~21:30 (開場 18:30)
- 開催場所: 赤坂パークビル 6階会議室
- 参加者: 25名 (定員30名、参加申込みは30名超)
- 参加費: 2000円
- 本日の主なプログラム内容
 - ー高坂勝さんからのお話
 - ー高坂さんのお米づくり参加者からの体験報告
 - ー参加者同士で意見交換・情報交換



開会

参加者は25名。

冒頭、「里都プロジェクト」発起人の大木から、メンバー紹介と「プロジェクト設立の背景」「里都プロジェクトが目指すこと」などをお話させていただきました。



里都プロジェクトメンバー。
左から、有福英幸、濱谷玲子、大木浩士



トークゲスト:高坂勝さんからのお話



・私は1994年に株式会社丸井に就職しました。入社後は、私も出世競争に参加しました。

・しかし中間管理職になると、上手いかなくなるが多くなってきます。バブルも弾けてしまい、売上げは上がらない。自分の本当に気持ちをごまかして会社の指示にしたがい、しだいに疲れ、心が壊れていきました。そして1999年9月に会社を辞めることにしました。

・その後1年間旅をしました。その旅の中で、私はいろいろなことを感じ、学んでいきました。自分はなぜ会社を辞めたのか、そんなことにも思いをめぐらしました。会社を辞めた後、友人・知人などに会いました。皆辛そうです。私は、これは社会全体が何かおかしいことになっているんじゃないかと思いました。・経済は本当は人を幸せにするものなのに、今は経済が人を不幸にしている。経済のために環境が破壊され、富める国が貧しい国を搾取し、搾取している側の国も実は借金だらけ。住んでいる人も苦しみにもがいている。そんなことに気づきました。

・2003年ごろ、フリーターをやりながら社会運動を続け、原発の問題に気づきました。また、「海外から水や食料をもってくるということは、海外から水や食料を奪ってくるということだ」という考え方にも触れました。そして「いつかは自給しよう」と心に決めました。

・2004年2月には世界社会フォーラムに参加し、市民主体の社会の作り方、政治のあり方を学びました。

・様々なことを学んだ私は、自分の夢であった「飲み屋」を作り、そこで情報発信をしようと思いました。そして2004年10月に「たまにはTSUKIでも眺めましょ」というお店をオープンさせます。

・急ぎすぎている社会。そんな社会に生きている人達に対して「自分の時間を取り戻しましょ」と、そんな思いを込めてつけた名前です。

・2009年4月には念願の「田んぼ」を始めました。現在は、千葉県の匝瑳(そうさ)市でお米と大豆を自給しています。

・現在は田んぼを持ち、自分で食べ物を作っています。ですから、あまり稼がなくてよくなっています。

・本のタイトルでもある「ダウンシフターズ」とは、経済が小さくなくても幸せになる、そんな生き方のことです。

・今はサラリーマン時代に比べ年収は半分です。しかしサラリーマン時代よりも時間はある好きなことができます。本を出すという夢はかなうし、お店の経営もずっと黒字です。

トークゲスト: 高坂勝さんからのお話

- ・私は「国民皆農的社會」を目指せないと考えています。自分で食べ物を作れるようになれば、お金を稼ぐことで悩まなくていい。このような社會になっていくことで、「誰もが当たり前、幸せに生きられる未来」が創れないかと考えています。
- ・本当は「地域分散型社會」というものが理想なんですよ。地域地域でお金がちやんと循環していく社會。大きなお金が入ってこなくてもいい。まわれればいいわけです。そして食べ物やエネルギーが無料だったら、分かち合いになっていく。土が恵んでくれるものっていうのは、みんな「分かち合い」になっていくんですよ。
- ・田舎では、月に15万円あれば生活できます。人とのつながりができてくれば、誰かが自分の欠点を補ってくれる。支えあうことができます。
- ・自分で実際に田んぼをやってみて感じることで、それは「楽しい」です。農業はクリエイティブです。何かを生み出すという作業はとても楽しいものです。
- ・自分で食べるものを、自分で作る。そのことで「生きていく自信」のようなものが芽生えてきます。この自信が持てることで「自立」なのではないかと感じています。自立すると、誰にも縛られなくなりますから、自分が言いたいことを言える、自分が本当にやりたいことをやれるようになるわけです。他人の評価を気にする必要はなくなっていくます。
- ・私は「冬期湛水・不耕起」というやり方で農業を行っています。稲刈り後に耕さず、冬場は田んぼに水をはるといふ農法です。
- ・そうすると微生物が増え、天然の腐葉土ができます。田んぼには生き物がたくさんいます。虫かえるもサンショウウオもいます。それらが循環して田んぼをつくっているんです。
- ・私の田んぼは、年間20日の作業でお米が作れます。とれる量は150kg。これは2.5人が1年間で食べる量と同じです。
- ・乾燥も天日干しです。電気を使いませんし、稲穂を逆さに吊るしますので、お米のところにしっかり栄養分が蓄えられます。だから本当に美味しいんです。
- ・田んぼがとても楽しいので、私はお店に来る方々を田んぼに連れて行ってしまいます。連れて行った人の数は、3年間でのべ300人くらいです。そして昨年は7組が自給を始めました。今年はさらに7組が田んぼをはじめました。来年は12組が田んぼをやる予定です。その度ごとに田んぼをどんどん開墾していきます。
- ・私たちがそんな活動をしていると、行政の人達との接点もできてきます。今では協同的な関係ができています。
- ・空き家を紹介されることもあります。庭付き一戸建てで、東京では考えられないくらいの金額で家を借りることができます。
- ・大企業と付き合いということは、カネとモノの付き合いでしかありません。でも小さいビジネスを行っている者同士は、心のこもったものが循環していきます。お金も循環し、紹介などによって自分のところに戻ってきます。そういう社會を作っていきたいんですね。
- ・「私に農業は難しい」という方もいます。その場合は、まじめに農業をしている農家さんとながればいいんです。忙しいときは手伝いに行くのもよいでしょう。そうすることで関係性がつくれていきます。
- ・農家さんと知り合っておくということは、命のリスクヘッジになるんです。いざという時、食べ物もある、住むところもある。私も放射能が不安になった時期に田舎の農家さんのお世話になりました。
- ・今後は池袋のお店が入り口になり、田んぼがある匝瑳(そうさ)が出口になるようなことをはじめたいと思っています。自給する人たちを増やし、移住の斡旋なんかもやっていきたいです。
- ・「消費社會にぶら下がってないと生きていけない」人々をその呪縛から解放してあげたいと思います。違う生き方もあるんだよ、ということを知ってもらいたいと思います。
- ・大量消費社會から抜け出す人が各地に出てくる。そのような消費者が増えてくると、企業も変わってくる。そんな動きを作っていきたいと考えています。

参加者同士の対話

各テーブルごとに自己紹介を行っていただき、「高坂さんの話を聞いて印象に残ったこと」などについて対話していただく時間を設けました。



高坂さんの農作業体験者からのお話

高坂さんの農作業に参加した濱谷玲子さんから、体験談や感想をうかがいました。



私は「半農半“場づくり”」を目指しています。そのきっかけを与えてくださったのが、高坂勝さんです。

私は昨年2月まで、アパレル業界でハンドバッグを売る販売員の仕事をしていました。接客業が好きで、お客様と接するのは楽しかったのですが、すでにモノは売れない時代です。持続不可能な経済システムを肌で感じながら、でも結局は自分もその中の一員なんだ、ということが苦しかったです。毎月安定したお給料は入ってくるのに、時間はない。心の安定なんて全くない...その矛盾に耐え切れなくなったとき、会社を辞める決意をしました。

その後、とにかく一人旅をしようと沖縄に飛びました。「綺麗な海を見ながら、一人で泣こう」と思っていたんです。相当、病んでました！そこで泊まった民宿が、偶然高坂さんご夫妻と一緒にでした。お話する中で「半農半X」や「ダウンシフターズ」という生き方があることを初めて、教えていただきました。

聞いた時は、「そんな生き方もあるんだ！」という驚きと、「でも本当にそんな生き方が可能なのかな？」という思いがありました。けれど同時に、「あれ？もしかしたら自分が求めていた生き方って、こういうことなんじゃないかな...」という、不思議と“心の真ん中に響いてくる感覚”もあったんです。ずっと探していた答えに、少し近づけたような。

それが、その後しばらく島暮らしをしたり旅を続ける中で、何だったのかわかってきました。それは“生きることの本質から離れない感覚”でした。私が半農半X、ダウンシフターズという生き方に魅かれた大きな理由は、“生きることの本質を味わえそうな生き方だから”です。

そんな答えを持って旅を終え、東京に帰ってきたのですが、現実はまだ都会暮らしです。お米を作りたくても土も田んぼもありません。そんな時、高坂さんのお店に遊びに行ったときに高坂さんから、「田んぼ行かない？」って言われたんです。「はい、行きたいです！」と、私は即答しました。

高坂さんの農作業体験者からのお話



私が即答できた理由は二つありました。

まず高坂さんの田んぼを、「見てみたい」と思いました。私もお米を作ったことがない素人ですが、高坂さんも素人から始められたとのこと。その上、冬期湛水という手法で、年間二十日間通えばお米ができるという...「実際どんな田んぼなんだろう」って、すごく興味があったんです。

二つめは「参加しやすかったこと」です。「どうしたら参加できるんですか？」と聞いたら、場所は千葉県の匝瑳(そうさ)。車をみんなで出すからそれに便乗すればいい、とのことでした。持ち物は、汚れてもいい服と長靴と軍手だけ。交通費は往復で2000円とのことでした。

そうして今年は春と秋、全部で三回お手伝いをさせていただきました。実際に行ってみて感じたことは、大きく三つあります。

一つは、気持ちいいこと。お日様の下で身体を動かし土に触れると、子供のころにかえったようなワクワク感がありました。見える景色は、青空と森の緑。聞こえてくるのは鳥の鳴き声、風の音、かえるの合唱。五感が喜ぶ感覚がすごくありました。

二つ目は、楽しいこと。田んぼの作業は一人ではできません。いつも何人かで田んぼに行きます。はじめて会う人とも、協力していろいろやっているうちに、いつの間にか仲良くなっています。一緒に作業をして、一緒にご飯を食べる。そして田んぼ作業の後に青空の下で飲むビールが、たまらなく美味しいんです。

三つ目は、取り戻せるということです。田んぼで作業をしていると、思考がとてもクリアになります。余計なものほどかかに行き、必要なものだけ入ってくる感覚になります。そして、今、自分が動いているのは、自分が食べるお米を作るため。生きることや命に直結していて、とてもわかりやすいんです。“自分がここで生かされていること、”こうして私たち人間は生かされてきた“という当たり前のことを取り戻すことができます。

『天空の城ラピュタ』に出てくるセリフに、「人間は土から離れては生きられない」がありますが、私も本気でそう思っています。

高坂さんへの質疑応答

■【質問】 高坂さんが「匠達市」の田んぼを選んだ理由は？

⇒お店で「これからは自給だ」と話していたら、店の常連だったお客さんから「田んぼを始めた」との話がありました。私は「田んぼをやるなら、「冬期湛水・不耕起」でやりたいと思っていましたが、条件のあう田んぼがなかなか見つかりませんでした。そのお客さんに詳しく話を聞いてみると、湧水が出るなど私がやりたい田んぼの条件と合うことが分りました。その後現地を見て、ここだと決めました。

■【質問】 都会の人が田んぼの作業をしようと思うと、「足(移動)」と「屋根」と「トイレ」が必要になってくと思いますが、どうされていますか？

⇒「足(移動)」はやはり車になります。何人かで車を出し合い、相乗りして現地に行くことが多いです。その調整は確かに手間がかかります。「屋根」と「トイレ」ですが、私が以前からやっている田んぼには、「屋根」と「トイレ」があります。しかし今年から開墾したところは何もありません。なければならないなりに日陰を見つけ、草(ごさ)を引いてご飯を食べます。トイレはみんな土に返しています。

■【質問】 隣の田んぼは「慣行農法(農薬や化学肥料を使う一般的な農法)」とのこと。高坂さんは「冬期湛水・不耕起」とのことですが、良好な関係が築けていますか？

⇒隣の田んぼをやっている方(作業している方)も、田んぼの「持ち主」ではないんです。持ち主が歳をとって田んぼができなくなり、知人にまかせているとのこと。なので、それほどうるさいことは言われません。ただ、こちら最低限のマナーには気をつけますし、顔を見ればあいさつして雑談もします。そうなれば情も通ってきて、みかんや飲み物を分け合ったりしています。やはり若い人たちが来てくれるというのが嬉しいみたいですね。農業のやり方が違って、人と人。お互いを認め合ったり、譲りあったりすることが大切だと思います。

■【質問】 会社に勤めていたころの「人とのつながり」と、現在の「人とのつながり」は、どのように変わりましたか？

⇒会社の仲間は今でも大切にしています。時々一緒に飲みに行くこともあります。ただ価値観は違ってしまっていますので、飲みに行ってもあまり楽しくありません。そうはいつても3月11日以降は、彼らもいろいろ気づいてきています。時代が変わってきたんですね。今まで価値観がぶつかっていた友人から相談を受けることもあります。やはり話をしているのは、価値観をともにできる仲間ですね。つながりも広がっていきます。

■【質問】 農家さんとの関係を作っていく際、はじめが大変だと思います。高坂さんはどのようにされたのでしょうか？

⇒まず、自分はよそ者なんだと認識し、謙虚に入っていました。考え方や価値観が違うところもありますが、基本的に田舎の方々は素朴で優しく、分かち合いの文化なんです。これまで本当に助けていただきました。まずは価値観があうところを見つけ、そこをベースにお話をしたり、お付き合いを始めていけばいいのかなと思っています。そして継続的にやることをやっていたら、よそ者でも認めていただけるのではないかと思います。どんな組織やコミュニティでも、新しい人が入ってくれば文句はです。そんな時は、「あ、自分が入ってきたことで話題を提供しているんだ」と思えば良いと思います。

■【質問】 私は以前アパレル系の仕事をしていました。「農業」ではなく「衣料」の分野を、高坂さんはどのように考えられていますか？

⇒着るものや履くものは、基本的に修理して使います。実は買うよりも修理する方が、金額的には高くつくことがあります。でもその方が愛着がわいてくるし楽しさもあります。服もできれば知り合いから買っていきます。修理するのも知り合いのお店に出しています。そうすればお金も気持ちよく払うことができます。

■【質問】 「高坂さんと一緒に田んぼに行きたい」と思ったらどうすればいいのでしょうか？

⇒WEBなどで参加申し込みをするようなシステム化には、少し抵抗があります。やはり私のお店に来ていただき、「田んぼに行きたい」とのお話をいただき、「じゃあ行ってみる？」と、そんな顔の見える関係から始められればと思います。知らない人同士が大人数で動こうとすると、どうしても調整のための作業が多くなってしまいます。やはりお会いをして、「この人と田んぼに行くと楽しそうだな」と思える方と一緒に田んぼに行けるといいなと思っています。

本日の感想の共有

席替えを行い、各テーブルごとに本日の感想の共有を行っていただきました。
参加者同士が気づきを共有しつながら作る、とても大切な時間になりました。



閉会

最後に里都プロジェクト事務局より、今後の里都プロジェクトの活動についてお話をさせていただきました。(2012年1月27日(金)に、第一回里都づくりフォーラムを開催いたします)

閉会後もたくさんの方々が会場に残り、名刺交換や意見交換を行っていました。



高坂さんの著書「減速して生きる ダウンシフターズ」なども当日会場で販売しました。



「たまにはTSUKIでも眺めましょ」の「つき出し」で出されているお豆を、お土産として参加者にお渡ししました。高坂さんのお店の近くに大桃豆腐さんという、被災地支援をしているお豆腐屋さんがあり、そこから購入しているお豆です。このような間接的な支援の仕方も大切な取り組みかも知れません。

次回の開催概要

2012年1月27日(金)に、「第一回里都づくりフォーラム」を下記の通り開催いたします。

- ゲスト(里都ナビゲーター):林 良樹(はやし よしき)さん
共著:『スマイル・レボリューション — 3・11から持続可能な地域社会へ』(白水社)
『持続可能な社会を目指す 8人のライフスタイル』(白水社)
- 日時:2012年1月27日(金)19:00-21:30ごろ
- 場所:タイワハウス(京王線・京王新線笹塚駅徒歩5分)
住所:東京都渋谷区笹塚2-42-17 秋元ビル2F
- 定員:50名(先着順とさせていただきます)
- 参加費:2,000円
- 主催:里都(さと)プロジェクト



林 良樹(はやし よしき)さん
=====
アースアーティスト(地球芸術家)
鴨川自然王国 理事
NPO法人うず 理事長
地域通貨 安房マネー運営委員
T&T研究所 研究員
=====

1968年、千葉県木更津市生まれ。様々な職業を経験した後、アメリカ、アジア、ヨーロッパを放浪。その後、鴨川の古民家に移住。現在は、家族4人で農的生活を送りながら、「半農半アーティスト」として活動中。その活動は、芸術、農、地域通貨、教育、自然エネルギー、エコビレッジと幅広く、そのすべてが「持続可能な社会づくり」へとつながる。